

## 大会テクニカルレポート

大会名 ハトマークフェアプレーカップ 第35回 東京都4年生サッカー大会

日時 6月18日(土) 6月19日(日) 会場 府中朝日グラウンド・府中少年サッカー場

東京都少年サッカー連盟 委員長 高山 清

技術指導部 部長 井上 雅志

文責総評 技術指導部 佐山 廣光

### 結果概要

フェアプレー賞 A・府中なでしこ B・パディフットボールクラブ C・富士見丘アンジェリーナ D・鶴牧サッカークラブ

グットマナー賞 A・西原少年サッカークラブ B・滝山JFC C・クリアーージュFCクリアンサー D・FCとんぼ

	試合数	得点数	1試合あたり得点数
今大会	96	418	4.4
昨大会	96	459	4.8

### 各グループ講評

Aグループ講評 文責 2 B運営競技部長 澤村 亘之 24試合・98得点・1試合あたり4.1得点

全体的に、「止める」「蹴る」「見る」ということがあまりうまく出来ない選手が多くみられた。

「止める」については、少し強いボールが来ると思った位置にコントロールが出来ない選手が多くみられ、相手のチャンスになってしまふことが多くみられた。

「蹴る」については、狙ってはいるが、短いパス・長いパス・クリアなどを行うが、相手にぶつける場面が多くみられた。

「見る」については、オフザボール・オンザボールの時に出来ている選手もいたが、全体的には点でとらえ線で見える選手が少なかった。ゴールキーパーからのビルドアップはほとんどのチームが行われていない

逆に、ゴールキーパーからがバントキックしたボールが相手ゴール前で行きチャンスとなる場面が多く見られた。

パディサッカークラブ54番古垣大樹選手は、オフザボールの時点でボールを受ける準備が出来ており、ファーストタッチ後パス・ドリブルの判断が出来ていた。

また、ゴールへ向かう姿勢もかなり高いものを感じられた。40分間のゲーム体力もかなりあると思われる。

この年代では少ないと思われるが、パディサッカークラブ44番の選手は、右サイドのディフェンスを行っていたがオフザボールの時点でスペースの取り方がうまくオンザボールになった時点でボールを要求し、ボールを受けた時点でドリブルを開始。

相手選手と接触してもバランスを崩すことなくシュートで終えることの出来る少ない選手だった。

Bグループ講評 文責 4 B東京担当 伊藤 賢司 24試合・107得点・1試合あたり4.5得点

初日は非常に暑く、厳しい環境の中での大会となった。どのチームの選手たちも、最後まで諦めず全力でプレーし、素晴らしい大会であった。基本的なボール操作の技術は高い選手が多い印象を受けた。一方で、速いプレッシャーを受けた中ではその技術を発揮できず、ボールを失う場面も多くみられた。オフ・ザ・ボールの段階で周りを見て、ポジショニングを細かく修正し、次のプレーをイメージすることがより必要であると感じた。FC大泉学園⑩大町彪悟くんは、ボールを受ける前に周りをよく見て、相手の状況に応じてファーストコントロールの位置を変えたり、体の向きを変えたりするなどの工夫をしながらプレーしていた。また、SKFCはゴールキーパー、ディフェンスラインを中心にビルドアップを行い、多くの選手が攻守に関わりながらボールを前に運んでいた。

守備に関しては、高い意識をもっているチームが多かった。FC多摩川ジュニア⑥鶴崎修斗くんは、前線から積極的に守備を行い、高い位置でボールを奪おうとする姿勢が見られた。球際の厳しさや最後まで諦めない姿勢が多くのチームの選手から見えた。一方で、ポジショニングの問題や、コミュニケーション不足などにより、簡単に裏を取られたり、突破されたりする場面も見られた。1対1の強さを連携して守備を行うことがより求められると感じた。攻守にわたって、オン・ザ・ボールでの技術を上げていくこと、それと同時にオフ・ザ・ボールでのプレーのレベルを上げていくことが今後の課題であると感じた。

大会全体を通して、多くのグリーンカードが出ていた。選手一人一人がフェアプレーを心掛けていたように感じた。全力で勝利を目指す中で、相手や審判、試合に関わる多くの方へのリスペクトを忘れず、これからもプレーして欲しいと感じた。

Cグループ講評 文責 14 B技術部長 青木 修 24試合・129得点・1試合あたり5.3得点

この年代において、まずボールを保持した時(オンザボール)のテクニックの発揮とそのためにオフザボールの時により良い準備(観て判断する)ができていくかに重点をおいて視察を行った。

Cグループ全体においては、上位パートに行くにつれ、止める、蹴る、運ぶ等のテクニックの質がより高くなっていった。また、ボール保持者への速い寄せと球際の激しい攻防が多く見られたのは印象深い。

判断を伴ったテクニックの発揮となると、予測や準備の面では課題も多く感じたが、1位パート決勝の2チームについては、判断を伴ったテクニックの発揮が多く見られた。1位パートで優勝したFC Bonos Meguroの選手たちは、止める、蹴る、運ぶ等のテクニックの質がより高く、また、ボールポゼッションの技術(スクリーン&ターン、速い足でのコントロール、体の向きなど)が他のチームに比べて高かった。そのため、相手選手の速い寄せに対してもしっかりと顔が上がり、状況を見て予測と判断ができ、ゲームを有利に進めていた。特に72番の選手は、攻守にわたってハードワークでプレーを続け、相手選手の早くて厳しい寄せに対しても、受ける前からしっかりと準備し、ファーストタッチで交わしながらボールを保持、ドリブル突破と状況判断の中からのパスによるアシストや自身でのシュートでゴールを奪うプレーを見せてくれた。

ゴールキーパーに関しては、シュートストップの技術は全体的に高いと感じた。ハイボールもしっかりキャッチできる選手も見られ、ビルドアップに関わる選手も見られた。

Dグループ評議 文責 7 B副委員長 小山善史 8 B副委員長 金子 博 24試合・84得点・1試合あたり3・5得点

7 B副委員長 小山 善史

6月19日(日) 1位パート1回戦、城北アスカ 対 J A C P A東京F C 戦

1位パートの試合という事で個々の能力は高い、城北アスカのゴール前に攻め込む姿勢は力強いが、ゴールを決めきれない、そこにはJ A C P A東京F Cの巧さがあった、15番西井君を中心にしっかりブロックを作り、最後のフィニッシュを自由に打たせない、又G Kからしっかりつなぎ、徐々にペースをつかみ押し返す、ボールコントロールと共に次のイメージも出来ていて常にスペースを意識している、特に14番川村君はスキル・判断・緩急の使い方も高い能力を発揮していた。

8 B副委員長 金子 博

昨年迄の試合内容はよく分からないが今年は少し小粒でおとなしいのかなと思った、只ゴールに向かっていく姿勢は随所に見られたし、個人でドリブル等でゴールに向かっていく選手も見ることが出来た、又ペナルティーエリア付近のF Kはかなり確率高く決める事が出来ていた、G Kがまだ小さく上の方に蹴られたら確率良くゴールが決まる点もあるが、小学生年代でも最近バイタルエリア付近は危険で、守備側はノーファールを心掛けないと4年生なりたてでもピンチになると改めて思った、育成年代でG Kを決めなくて交代しながらプレーする事を実践していたチームもあった、Y Nキッカーズの12番田中君は前半G K・後半フィールドプレイヤーで出ていた、G Kとしてもタイミング良く出てピンチを防ぎ、フィールドプレイヤーとしても左サイドで得点も決めて活躍していた、G Kとして出るタイミングが良いのはフィールドプレイヤーとしてプレーしている結果かも知れない、フォワードが得点を決めるよりも、中盤より後ろ目のプレイヤーが得点を決める事が多かった様に思われる、練馬F C U-12の23番永野君がそうであった様に、やや後ろ目からゲームを作り、チャンスには前へ出て行きゴールを決める事が多かった、永野君が残念なのは初日の2試合目のハーフタイムに鼻血が止まらず後半は出場出来ず、二日目パフォーマンスが上がらなかった事だ、残念だったのはG K同士が蹴りあってしまう試合があった事です、あと前にいく事が優先で攻撃が単調になってしまう事がみられた、もう少しボールを保持したり、ワイドに使ったりすればプレーの中が広がった様に思われたし、次のプレーの意思を持ったファーストコントロールを意識すれば良かったと思います。

### 総評

この大会において、観て判断する事と、コミュニケーションを取りながら攻守に関わり続ける事を主眼として視察を行った。攻撃に関しては、ボールを保持してから観て判断する選手が多くみられたが、ボールを受けたサード・オブ・ザ・ピッチでの判断を伴ったプレーが随所にみられた。守備に関しては、ボールを注視するあまり、インターセプトやゴールサイドにポジションを取る選手は少なく感じた。コミュニケーションを取りながら攻守に関わる選手が、前年度より多くみられた。止める・蹴るの基本は重要であるが、常に観る、観ておく事を習慣化し、より厳しい環境の中でも判断を伴ったテクニックが発揮できる選手になって欲しい。